月とマナザギ。

St.2

はかなき双月、
かくて月食む
しろうさぎ。

オークロア。

徒埜けんしん
Story by Tadano Kenshin
Illustration 魔太郎

本編抜粋試し読み
＊ 冒頭編 ＊

GA文庫

「初日から遅刻しなくてよかった」
短いようで長く感じた始業式も無事終わり、朔(さく)は柏木(かしわぎ)陽菜(ひな)と帰宅の途についていた。
「ふふッ……でも、伊岐(いき)くん、ギリギリだったよ？」
朔の横で柏木がそう言って柔(やわ)らかく笑う。
冬の冷たい風が吹いて、柏木のさらさらした黒髪がふわりとなびいた。
「でも、よかったの？　いつもだったら稲羽(いなば)さんたちと帰るのに、今日は一緒じゃなくて」
柏木がうかがうように聞いてくる。
確かに朔はいつも白(しろ)と一緒に帰っていた。最近はそこに春(はる)や鈴(りん)も加わっている。

だから柏木が疑問に思うのは当然だ。

「うん……それがね」

三学期の終業式が終わった後。

成績の良い白は特待生についての説明を受けるため、職員室に呼び出された。

鈴も宿題をさぼった咎(とが)で呼び出されていて、春は鈴に付き合っていた。

「それで、どっちも少し時間がかかりそうだったから、今日は先に帰ることにしたんだ。付きあわせちゃってごめんね？」

「え？　あ、ううん。わ、私も今日偶然一緒に帰る人いなかったし……」

嘘(うそ)だった。

朔が「一緒に帰らない？」と声をかけた後、柏木は友達に「きょ、今日はちょっと用事ができちゃって……」と両手を合わせて拝(おが)んでいた。

柏木の友人も、「はいはい。わかってるわかってる」と柏木の背中を押してくれていた。

「だったらいいんだけど。おたみたいで……」友達にも気を使わせちゃった

朔が謝ると、柏木は胸の前で大きく手を振った。

「大丈夫だよ。むしろ応援してくれたし……」

きゅっと拳(こぶし)を握ると、朔に向かって優しく微笑(ほほえ)む。

朔はその表情を見ただけで、柏木がなぜ一緒に帰ろうと言ってくれたのかわかった。

少し時間が経(た)ったとはいえ、身内を喪(うしな)った朔が一柱で帰ろうとしているのを不憫(ふびん)に思って、気を使ってくれたのだろう。

だから、一緒に帰る友達などいないと嘘までついて、朔に気を配ってくれたに違いない。

「柏木さん、いつも俺のことを思ってくれてありがとう」

先代総長だった朔の父が暗殺されてから、まだ半年も経っていない。

死闘を繰り広げた六坂(むつさか)組との抗争が終わってから数えるなら、三か月も経っていないのだ。

やはり柏木は優しいと朔は思った。クラスで人気があるのも頷(うなず)ける。

「柏木さんの気持ち、とてもうれしいよ」

だから、そんな柏木に少しでも感謝の気持ちを伝えたくて、朔は笑顔でお礼を言った。

「ううん、とんでもな――って、えええ!?」

刹那(せつな)、柏木の顔が紅潮(こうちょう)する。

「え、えええっ、い、伊岐君？　そっ、そんな。でも……」

柏木が尋常じゃないほど照れた。

「？　柏木さん、どうしたの？」

「ど、どうしたって言うか、えっと、その……わ、私の、気持ちって――いつ気付いたの!?」

気を使っていたことがばれて恥ずかしいのだろう。そういうところも心優しい柏木らしい。

「だいぶ前からかな。柏木さんのこと見てたらすぐわかったよ」

「は、はぅぅ……ソ、ソウナンダー!!」

はわわはわわと言いながら柏木がぐるぐると目を回す。そして少しだけためらってから、思い切った様子で口を開いた。

「あっ、あのっ!　伊岐くん!」

そのまま湯気が立ち上りそうなくらい、頬(ほお)を真(ま)っ赤(か)に染めて言う。

「そこまで想いが伝わってるなら、あ、あのっ、よかっ

たら私と――」

「あにさま！」

だが、時を同じくして小柄な少年がまっすぐに朔のほうへと走ってきた。

背後でポニーテールに結った長めの黒髪が揺れている。

少年はそのままの勢いで朔にひしっと抱きついた。

「あにさま！　お久しぶりなのです！」

「おお、優月（ゆづき）か。迎えに来てくれたの？」

「はいです！　帰り道でならず者に絡（から）まれてもいけませぬゆえ！」

「そうかそうか。ありがとうな」
きょろきょろ周りに絶え間なく視線をやる優月をわしわしと撫(な)でてやる。
「ごめん話の途中で。紹介するよ。この子は伊岐の分家、天月(あまつき)家の優月。俺(おれ)の従弟(いとこ)なんだ」
「……なるほど、優月、さん？」
柏木はなぜかすっかり気を削(そ)がれたような表情をしていた。
理由がわからない朔は優月の紹介を続ける。
「人間にしか見えないけど月神なんだ。天月一家の名跡(みょうせき)を継ぐために、うちに修行しに来たんだよ」
朔が柏木に説明すると、優月は胸を張った。

優月の頭を撫でながら、朔がやんわりと釘(くぎ)を刺す。

「従弟で幼馴染(おさなじみ)だけど、修行しに来ているのだから甘えたらだめだぞ！」

「覚悟しているのです！」

そして優月は柏木に向き直って、深々と頭を下げた。

「天月優月と申します。以後お見知りおきをよろしくなのです」

今度は朔が柏木を優月に紹介する。

「それで、こっちが柏木さん。クラスでいろいろとお世話になってるんだ」

「お、お世話なんて大げさだよ……でも、さすが伊岐くんの従妹(いとこ)さんだね。すごく可愛(かわい)い」

なんとか気持ちを立て直した柏木も、微笑みながら優月の頭を撫でた。

そこで朔は柏木の誤解に気付く。

「柏木さん。優月は男の子なんだ。まだ声変わりしていないから気付かないかもしれないけど」

可愛らしいのは声だけではない。顔も格好も可愛らしい。優月を見たら百人が百人とも美少女だと判断するだろう。

「え？」

もちろん例外ではない柏木も目を丸くする。

「ぼくは声変わりが遅いのです。だからたまに女の子に間違えられるのです……」

優月がしょんぼりと肩を落とした。

女の子に間違えられるのは声変わりしていないことだけが理由ではないと朔は思う。

だが決してそれは口には出さない。優月は十三歳。微妙なお年頃(としごろ)なのだ。

「声変わりは急に来ることも多いから、焦(あせ)らなくてもいいと思うぞ」

朔が元気づけるためにそう言うと、優月はさっと笑顔になった。

「声変わりすれば、もう女の子に間違えられることはなくなるのです！」

「そうだね。私もきっとそうなると思うな？」

柏木が合わせてそう言うと、優月はすっかり元気に

なった。

「あにさま！　それでは早く月夜見（つくよみ）の社（やしろ）に戻りましょう！」

優月はぐいぐいと朔を引っ張っていこうとする。

そんな優月を見て、柏木がしょんぼりとため息をついた。

「柏木さん？　大丈夫？　そういえば、さっき何か言いかけてなかった？」

朔が先程まですごく元気そうだった柏木にそう尋ねると、柏木は笑顔で首を振った。

「……ううん、何でもないよ。今日はありがとう。続きはまた今度ね」

「こっちから誘ったのに中途半端(はんぱ)になっちゃってごめんね」

「ううん。気にしないで。じゃあ私はこっちだから……」

「気を付けて帰ってね」

「伊岐くん、ありがと。優月くん。これからよろしくね」

「はいなのです！」

朔の手をぐいぐい引っ張る優月は一度だけ振り向くと、柏木ににこっと微笑みかけた。

それを見て、柏木も手を振って応(こた)えた。

バトルあり、可愛さあり、切なさありの本編もよろしくお願いします。

●月とうさぎのフォークロア。

St.2 はかなき双月、かくて月食むしろうさぎ。

●著：徒埜けんしん　●イラスト：魔太郎

●本体価格 600 円 (税込 648 円)

● 2017 年 4 月 15 日発売